平成２６年度　プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	日本・フィリピン学生交流と異文化理解プロジェクト
研　究　所　名	異文化理解プロジェクト　研究所（所長　阿佐美　敦子　准教授　）
設　置　開　始	2014.4.1
設　置　終　了	2017.3.31

■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

H26 前期では、明治大学文明とマネジメント研究所と協働し、Global English Online プログラムに参加・推進し、同プログラム参加他大学とともに、覚書を交わしたフィリピン、セブ島に在すヴィサヤ大学人文学部を訪れ、後期に実施する SKYPE 交流の事前打ち合わせをおこなった。

H26 後期では、11 月、12 月、1 月の計 3 回にわたり、本学学生 14 名がヴィサヤ大学学生 8 名と各 90 分あまりの交流を実施した。第一回に於いては、フィリピンでも人気の高いキャラクターであるキティをモチーフとした、いわゆる「ご当地キティ」ボールペンを活用し、日本各地を英語で紹介、第二回に於いては、世界遺産にも登録された和食、海外でも話題となっているジャパニーズ・エンターテイメント、外国人旅行者に人気の秋葉原、浅草、川越の各エリアを紹介、第三回に於いては、本学の紹介を筆頭に等身大の学生生活や日本の家族のあり方について紹介し、フィリピン人学生の関心を得ることができた。一方、ヴィサヤ大学学生のプレゼンテーションでは、第一回に於いては、国民の多くがカトリック教徒ということもあり、宗教行事を中心に同国の年間行事、呼応する家庭生活について、第二回に於いては、フィリピン各地の観光名所について、さらに第三回に於いては、参加メンバーの個人的関心に基づき、日常生活について紹介がなされた。

計三回の交流終了後の両大学学生によるエッセイでは、本実証実験に対する極めて良好な感想が表され、本交流が双方の学生にとって大変有効な相互理解の手段となったことが示されている。

■現在までの達成度

本研究に於ける実証実験の前後に、本学学生に対して「私の異文化理解・英語発信能力 CAN-DO リスト」と題する 5 段階評価のセルフ・アセスメントを実施した結果、前後者共に興味深い数値を見ることができる。

例を挙げると、「日比の文化的な関係について理解している」の項目については、プレ・アセスメントでは「やや弱い」が 7 名と最多であったものの、ポスト・アセスメントでは「やや強い」「強い」で占められている。一方で、「独自の文化について相手にわかりやすく伝えることができる」の項目については、プレ・アセスメントでは最多 8 名の「やや弱い」が 1 名減の 7 名になったものの、2 名であった「弱い」が 4 名に増加し、今後の課題を残している。

■次年度以降の研究（見込み）

H26 の交流は初年度ということもあり、第一目標として相互に親近感を持てるようになることを念頭に置いた交流となった。従って、日比間に重く存在する日本軍による占領、続く大量殺害等々の暗黒の歴史問題に関しては敢えて触れないように務めた。次年度の交流の際には、参加学生の英語運用能力が実質的に向上することも踏まえ、前年度には実現できなかったより社会学的に踏み込んだテーマのプレゼンテーション、さらにはディスカッションへと展開し、本学学生がいかにフィリピンを深く理解し、また日本の文化を友好的に

伝えることが可能か否かを研究するものとする。これにより、双方の学生の共生共栄と交互尊重のための情報交換・情報共有・共通の意味形成行為に至る一助としたい。

■研究活動における成果

学生・生徒の教育及び支援に関する還元

H26 実施の交流後、双方の参加学生にポスト・セッション・エッセイを執筆してもらったところ、随所に見られる共通のキーワードは「とても良い経験をした」「また是非、同様の体験を積みたい」の二つであった。本学学生によるプレ・セッション・エッセイでは全員が自身の英語運用能力に対する自信の無さに起因するプレゼンへの不安を訴えていたが、中級レベルに満たない英語スキルであっても、ノン・バーバル・コミュニケーションを工夫し、相手に対して敬意を持つこと、相手の文化についてオープンな心を持つこと、何より伝えたいという熱意、誠意を表すことができ、貴重な成功体験となった。交流前は英語をほぼ母語として使用するフィリピン人学生たちが本学学生の稚拙とも取れる英語によるプレゼンテーションをいかに受け取るかが非常に憂慮されたが、彼らによるポスト・セッション・エッセイからも、得意とは言えない英語を懸命に努力して話している真摯な様子が評価されており、日本および日本人に対して親近感、好意が大きく増したと記されている。